

村上大祐市長質疑における疑義、指摘

2019年2月18日

「嬉野をよくする市民の会」代表
宮崎 誠一

村上大祐市長が、2019年2月14日の第4回政治倫理審査会において発言した内容について疑義を呈し、指摘していく（なお発言は抄録で、太字・傍線は 宮崎）。

吉田会長：空港からセグウェイジャパンまではどのような経路で？

村上市長：車でまいりました。会食相手方（ホテル所有者、会食費用負担者）さんの車で。職員と合流して。

吉田会長：会食相手方（ホテル所有者、会食費用負担者）氏、会食参加者（アニメ企画発案者）氏も一緒に視察した？

村上市長：相違ございません。

羽田空港→セグウェイベース（神奈川県海老名市）→ホテル「レム六本木」。これらの移動は会食相手方（ホテル所有者、会食費用負担者）氏の車両によってであった。従って、村上市長は交通費の虚偽請求を認めたことになる【第2回審査会資料23「7月9日の出張とは」】。公務員倫理規程で認められている③職務として利害関係者を訪問した際に、周囲の交通事情等からみて相当と認められる範囲で提供される自動車（日常的に利用しているもの）を利用することに該当せず、問題がある【調査請求書・別添資料5の1、14ページ】。会食相手方（ホテル所有者、会食費用負担者）氏、会食参加者（アニメ企画発案者）氏が、結果として村上市長のセグウェイ視察（公務出張）のお膳立てをし同行していることから、この時点で利害関係性が生じている（村上大祐氏が嬉野市長だと分かっていた）と解すべきである。

吉田：参加した理由は？

村上：嬉野のことに興味を持ってきているということでありましたので、まさにトップセールス。また、著名な方もいらっしゃいますので、市の通常教務

で会わない業態の方だということも何となく察しましたので、そういうことであれば見聞を広めるためということも併せて参加するということを決めた。

当初の「私的な会合」から主張が変遷している。公務の意味合いもあるということなのか。私的な関係とは到底言えないことに気付いたからであろう【別添資料 5の1「事業者の立場から見た公務員との接触ルールについて」15ページ】。いずれにしても、どうして、会食の問題を指摘した者や Facebook で会食写真が 転載された際に、公に説明しなかったのか。また、主張が変わっている点を審査会が問題にしていないのはなぜか。

吉田：市長も泡を手に載せている写真がアップされている。

村上：ポコポコ上がっている。どういうものかなと。ふと、その辺で吹いたということではあります。

吉田：市職員の行動に対して思ったことあるか。

村上：いろいろと内輪の中でもありますので、いろいろと周りのノリみたいなのと ころでしているところがあるのではないかと。

吉田：その日、市の職員は宿泊されている。

村上：はい。

吉田：それについてその時点でのお考えは。

村上：結果として宿泊したのはあまりよろしいことではないというふうに考えております。

建設・新幹線課の市職員 A が泡風呂に入り、市職員 B らと宿泊しているのを黙認したのは、嬉野市のトップである市長の政治倫理上の問題にならないのか。複数筋から明白な公務員倫理規程違反を指摘されながら、村上市長は現在まで一切の処分を行っていない。泡を吹いた点だけを切り取り、市長としてふさわしい行為だったか否かを判断するのは、著しく妥当性を欠いている。木を見て森を見ずの議論だ。

山下副会長：見たところ、それぞれに席を設けている形ではなくて、ビュッフェ方式か。

村上：指定席というわけではなく、移動もした。そういう認識で差し支えなかるうかと。

山下：会合に出席した動機が嬉野をPRしたい、見識を広めたいということでありまして、特に今日地方自治体は少子高齢化で、以下に自治体としての魅力を高めていくかというのがどこの自治体でも重要なことになっているという

ことは間違いない。そういう意味で、人脈を広げ、嬉野を売り込むというのは重要なことだと思いますけれども、一方、政治倫理条例が求める倫理基準、相手方との距離の問題。市長としてのお考えは。

村上：なるべくみなさんと近いところで親しみやすさを打ち出すのも市の魅力をアピールすることだと思っておりましたので、その辺は若くして市長になっているということもありますので、なるべくみなさんと波長、アンテナを合わせたいというのもしなくてはいけないというふうに思っておりましたけれども、今回、こういったことで誤解を招きかねないということも、一つ教訓として、私の中でもしっかり刻まなければいけませんので、その辺は今後については吟味、熟慮する必要があるというふうに考えております。

村上市長も審査会も、今後の話ではなく、今回の話をすべきだった。「誤解を招く→季下に冠を正した」ということであり、結果責任を問われる。「私的な会合」だったものが、山下副会長により「人脈を広げ、嬉野を売り込む」という理由付けがなされ、それに村上市長も乗っかっている。政治倫理審査会の副会長が助け船を出す形になっており、請求者からは到底理解できないやり取りである。

村上：会食の事実に加えて、憶測や風聞も加えて拡散したということで嬉野市や嬉野市役所に対するイメージを損なう事態を招いたということは私の不徳のいたすところであると思いますし、その辺についてはしっかり責任を取っていく所存でございます。今後、いろいろ新幹線事業も含めて大型事業が控えておるわけでありまして、一点の曇りもないように、そういった契約の成立過程についてしっかり透明性を今まで以上に確保しながら慎重に、市民の方にしっかり説明をしながら、進めていく。そういった中で、市民のご期待に応えていきたいというふうに考えておるところでございます。

憶測や風聞というのは、建設・新幹線課部署と嬉野創生機構の受発注関係における不透明さが根底にある。写真を転載した市民はそれを認識していた。平成30年9月14日には、公益通報を発端に東京ベイコート倶楽部での会食を含め具体的な問題指摘がなされた。その際に村上市長は「これまでの流れでいくと、ずいぶん今後の計画も含めて、(嬉野)創生機構ありきで話が進んでいるものがいくつか見受けられました。それについては「白紙」にしないといけない。その中でもう一回ゼロベースで事業を見直して再構築をしないことには、一点の曇りもないものにはならんだろうと思いますので、私はそのように指示をいたしました」と答えた。しかし、その後すぐ一切の問題を否定し、見直しも全く行っていない。建設・新幹線課部署の発注業務については「嬉野をよく

する市民の会」が住民監査請求を3件行っており、今後も予定している。だが、この監査請求についても村上市長は一切の公的な見解を示していない。言っていることとやっていることがはなはだしく乖離しており、発言に信頼が置けない。

いずれしても、審査会は市民の会が提出した村上市長に対する質問を無視した。市長側の弁明書、陳述書を採用する一方で、市民の会の資料や陳述書を軽んじている。市民側の意見陳述も認めておらず、もっぱら村上市長側の言い訳を聞く側に回っている。政治倫理審査会は誰のため、何のために開かれているのか、審査会委員は全く理解していないと言わざるを得ない。残念である。